

1. ジャンボが来た日

「さあ、みんなで手を振ろうね。」屋上に上がって、本道初公開のボーイング747—ジャンボジェットの千歳市内顔見世飛行を見たのは、小学校6年のとき。もちろん授業はお休み。札幌オリンピックを翌年に控え、大会期間中臨時就航するためのテストで飛来したのだった。

初めて見るジャンボの大きさに、飛行機を見慣れている千歳っ子も、かなりの興奮だった。

このとき、羽田—千歳間の定期便としてジャンボが定期就航することは決まっていなかったため、後に空港までジャンボを見に行った記憶がある。

余談だが、プロゴルファーの尾崎将司選手も、この年の日本プロゴルフ選手権でツアー初優勝を果たし、名実共に“ジャンボ尾崎”となった。

2. 長い前夜祭

実家のレコード屋で、私の勉強机の真下にある屋外用スピーカーから、一日中、虹と雪のバラードとおふくろさんが聞こえる頃、聖火はやってきた。

小学校は、たまたま弾丸道路沿いにあり、当日は割り箸にヤマト糊で日の丸の小旗を作り、沿道で横一列、目の前を走り去った聖火に、いよいよ始まるという実感が湧く。もちろん授業はお休み。

そして、大会直前、天皇陛下が来るということで、またまた小旗の出番である。もちろん授業はお休み。

この頃、切手ブームだったが、郵便局で初日カバーを買った。写真にあるようなもので、記念切手を買って貼り、記念スタンプを押して一丁上がり。それにしても妙に妖艶な絵である。まあ、いろいろやるうちに開会式の頃にはすっかり五輪かぶれの少年になっていた。



三越の B5 版スタンプ帖の表紙



「記念初日カバー」なる封筒セット(3 枚組)

3. 観戦記

冬休みを短縮した振替に、オリンピック休暇があった。3日連続で観戦した幸せな日々を書いておく。



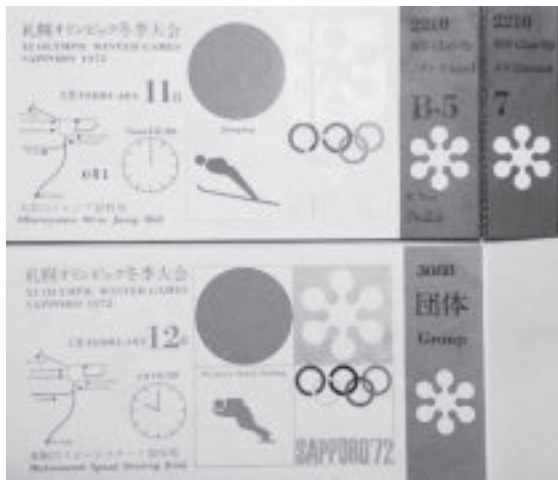
アイスホッケーのチケット

(1) アイスホッケー

親戚にもらったチケットは、決勝リーグのアメリカ VS フィンランド。アメリカはプロ不参加でも銀メダルだった。アイスホッケーをナマで初めて見て、本場の迫力とはこういうものだ実感したものだ。

(2) 90m 級純ジャンプ(現在のラージヒル)

笠谷は絶対に 90m 級でも勝つと信じ、あと 5m 飛ばせば金メダルだったと、半ベそでバスに乗った帰り道。それにしても、ジャンプで特等席などというプラチナチケットを、叔父さんはどうやって手に入れたのか、不思議だった。誘致活動の頃から何某が関係していたのが要因だったと、今なら理解できる。



純ジャンプとスピードスケートのチケット

(3) スピードスケート女子 3000m

こんなことを書いたら怒られるが、本音を言おう。観戦者にとって最も退屈な競技。両手を後ろに組んで、ゆらゆらとスピード感無く 7 周半。この頃、日本女子スケート界はまだ黎明期で、当然周回遅れ。

朝 7 時からバスで真駒内まできて、立ち見席の最後尾で震えながら、2 時間の修行は終わった。

千歳では冬の体育がスケートだから観戦もスケートになったんだと納得していたが、高校に入って真駒内小学校出身者に、開会式で風船を飛ばした話を聞いて、首を絞めてやりたくなった。

4. 恥ずかしいアフターの話

さて、タイトルにある英語の話。最初はジャンプ見たさに千歳空港まで行ったのだが、そこで見たの

は帰路につく各国の選手団だった。オリンピック選手を間近に見て興奮した友達の T が、サイン帳を買ってからまた来ようと言いだし、“追っかけ隊”が誕生した。

日本選手も何人かいて、アイスホッケーチームの若林兄弟たちにもサインをもらった。しかし、日本選手は少なく、すぐに飽きてしまった。

外国人選手ならたくさんいた。誰だかよくわからんけど、彼らからもサインをもらうには…まあ身振り手振りでサイン帳を出せば何とかかなるかと思い、追っかけの続きを試みたが、なかなかきっかけが掴めないのである。

今ならこんな勇氣はないが、英会話教室でちょっとかじった英語で話してみることにした。

「Excuse me. Are you an orympic player?」

これには皆さん、親切に応じてくれて、作戦成功。調子に乗って次から次にやっていたら、ふと声を掛けた外国人は、案外お年を召した方だった。そのおじさんは私のこの英語を聞くや、大声で笑い出し、サインと共に握手、そして水色のバッジをくれた。そこには五輪のマークと、「München'72」という文字が刻まれていた。

ここに、笑い声を聞きつけた道新の記者がやってきた。「君たち、ここでなにやってんの?」「はい、選手にサインをもらいに来ました」記者はそのおじさんと話し、何やら恐縮した様子。「君、この方はね、西ドイツの大使さんだよ」「大使? はあ。選手じゃないんだ。どうりでじじいだと思った」

翌朝、写真入りの新聞を見た母があきれた様子。

見出しは、「空港ではチビッコがサイン攻め」。記事には、市内の小学生 T 君たちは、外国人と見るやカタコト英語で誰それ構わず話しかけ、サインをもらっている云々とあり、汗顔の至りであったことは言うまでも無い。

金 秀 俊(こん ひでとし)

技術士(応用理学/総合技術監理部門)

株式会社ドーコン

